

**正史三国志の  
注の注と  
正史三国志を  
紹介する本を  
紹介する本**

ゾック神社

# はじめに

本書は主に真・三國無双シリーズや三国志を題材とした各種ソーシャルゲームなど、ゲームから三国志を知り、そこから歴史上の三国時代についての興味を持ったものの、こういったものを読めば詳しくなれるのかよくわからない、正史の三国志は難しそう、という方に向けて書かれたものです。三国志演義や蒼天航路など、「お話の三国志」から歴史上の三国時代について興味を持たれた方もカバーします。今回は「ちゃんと正史三国志も読んでるぜ」という方にも納得していただけるよう、正史三国志以外の歴史書についての情報を強化しました。本初もとい本書が歴史の三国時代を楽しむ一助になれば幸いです。なお、本書の文章の一部は2015年夏コミで発行した『偏見を育てる三国志の読み方』から流用されています。

## 目次

1. 「正史」三国志とは何か？	4
2. 「三国志」を扱う正史三国志以外の史書	12
3. 偏見で語る裴松之注の注	15
4. 正史三国志を紹介する本の紹介	28
4-1. 人物について知りたい	29
4-2. 全体の流れを知りたい	31
4-2-1. 神速戦法で知りたい	31
4-2-2. 長くても堅実に知りたい	34
4-3. 小ネタを知りたい	36
4-3-1. 軍事・戦争を知りたい	36
4-3-2. その他の小ネタを知りたい	38

## 1. 「正史」三国志とは何か？

三国志界限では「正史」「正史三国志」と呼ばれる歴史書の三国志。しかし「正史三国志」という名前の書物は存在しません。蜀に仕えていた陳寿という人物が、蜀の滅亡後晋に仕え、私撰（皇帝の命令

によらず書かれた) 史書の「三国志」が彼の死後「正史」として認められた、というのが実際のところです。

なお、陳寿の三国志を正史三国志と呼ぶのは色々な観点から必ずしも正しくはないのですが、わかりやすさのためこの本の中では陳寿の三国志を正史三国志と呼びます。

## ■正史とは何か？

正史というのは中国の歴史書で特に王朝によってまっとうな歴史書であると認められた書物のことを指します。「断代史」といい、現在進行中の王朝によつての編纂を許さず、その王朝が滅んだ後別の王朝が編纂をする、という形式を取ります。これはなぜかというと現在進行中の王朝はその権力を用い史書に自分の都合が良いことばかり書かせる可能性があるからです。

正史に対して、国家に認められていない歴史書のことを野史、外史、私史、稗史などと呼びます。

## ■正史といえども本当のことばかり書いてあるわけではない

勘違いしやすいのですが、正史は「正しく事実が書かれている書物」ではありません。正史の中でも精度が高いとされる三国志の本文中にも諸葛恪が暗殺される日の朝、顔を洗う水や服が何か生臭かったとか公孫淵は事前に流星が落ちた地点で討ち取られた、みたいなオカルト話が書かれています。これが本当にあったことだと思いますか？ さすがにこれは実際に起きたこととは思えませんよね。当時の文化に起因してオカルトは混入してしまうのです。

また、断代史システムにより確かに自画自賛を避けることはできます。しかし、別の問題が生まれます。次以降の王朝は前の王朝を滅ぼしているはずなので、「前の王朝は悪かったのだ！ だから大正義現王朝が滅ぼしたのだ！」といった感じで前の王朝が必要以上に悪く書かれることがあります。また、史書が編纂された時代の王朝に都合の悪いことはやっぱり書けませんし、史書を編纂する時に参考にする文書がすでに前王朝にいじくられた後だったということも考えられます。あくまでも正史は「王朝に認められた歴史書」とし

## 2.「三国志」を扱う正史三国志以外の史書

三国時代という狭義で三国が鼎立していた時期、すなわち呉の建国 222 年から蜀の滅亡 263 年までを指しますが、正史三国志では後漢末からの出来事を取り扱っています。それに倣い、広義の三国時代、つまり黄巾の乱の蜂起 184 年から、晋の天下統一 280 年までを扱った正史と正史以外の重要な歴史書を案内します。正史三国志同様に重視すべき書物です。

### ■後漢書

編者は范曄。南朝宋の歴史家・政治家・文学者で会稽郡の出身。父の范泰は侍中・光祿大夫まで登り、死後は車騎將軍を追贈されたように、名族の出身だが、彼自身は庶子だった。

若い頃から学問を好み、歴史に通じ文章が巧みであるとされた。宋が建国されると建国者劉裕の子、彭城王劉義康の下で累進したが、彼の母の葬儀の最中に宴会を開いたため不興を買い左遷され、その不遇の中で『後漢書』を編纂した。その後、劉義康が専横して文帝に処罰された後、彼を復権させようという謀議に加わったため一族もろとも処刑された。彼は無神論者で、後漢書の中で特に仏教を批難している。

『後漢書』は正史の一つで、後漢について書かれた歴史書。成立は 432 年。編纂途中で范曄が処刑されたので、志（天文・地理・礼楽・制度など、分野別の歴史）がなかった。そこで南朝梁の劉昭が、西晋の司馬彪が著した『続漢書』の志を合わせて注を付けた。

成立が 432 年と後漢滅亡から 200 年以上も経過しているため、当書の他にも後漢滅亡後に後漢を扱った歴史書は多数書かれている。

呉の謝承『後漢書』、呉の薛瑩『後漢書』、西晋の華『後漢書』（漢後書）とも、西晋の司馬彪『続漢書』、東晋の謝沈『後漢書』、東晋の袁山松『後漢書』、東晋の張『漢紀』、著者不明『後漢書』、これらを八家後漢書という。これに加え、後漢滅亡前から書かれた同時代史書である『東觀漢記』、東晋の袁宏の『後漢紀』などがある。范曄は『東觀漢記』『後漢紀』を基本として、これらを参考にして『後漢書』を編纂した。

が、神宗から『資治通鑑』と改名された。治世に利益があつて（資して）歴代為政者の鑑（かがみ）とするに足る通史という意味。正史に記載されていない322種の史料を収集し、それを複数人で時系列順に整理して長大な資料集を作り、そこから司馬光が政治に役立つものを選び取るという手順で作成された。司馬光ともども、とても評価が高い。

時系列順にできごとが記載されており流れがわかりやすい。そして三国時代前後も通じて記録されているため、三国時代からはみ出して書かれている宮城谷昌光『三国志』は大いにこの書物を参考としている。また、『三国志演義』も『資治通鑑』を参考にしている。後年元の胡三省により注釈（「胡注」）を付けられており、この注釈も非常に評価が高い。なお、『資治通鑑』は中国の大部分を支配していた実績を理由に魏を正統な王朝として扱っている。

### 3. 偏見で語る裴松之注の注

このコーナーでは裴松之の注に引用される書物の中で主だったものについて説明していきます。裴松之注に採用された書物の多くは散逸して失われており、裴松之注の中でだけその存在を確認できるものものが多くあります。裴松之は多数の書物を使用しており、その信憑性はまちまちです。裴松之自身も書物の信憑性を評価していません。ここではそれぞれの著者が何者であるかとどのような背景で書かれたものであるかをわかる範囲で紹介し、「『搜神記』に書いてあることか、あんまり真面目に聞いてもしょうがなさそうだな」

「『魏略』か。これは魏についての話だから信用できそうだ」

「『江表伝』の話ね、注意して読もう」といったような判断をするための一助になれば、と思います。

#### ■ 『異同雑語』

『雑記』『異同記』ともいう（『雑記』『異同記』と書かれている書物と同じ書物だと考えられている）。

裴松之注内に「孫盛曰く」とある部分はこの書物からの引用とも言われる。

## ■ 『山陽公載記』

著者は樂資。東晋の著作郎らしいが、詳しいことはわからない。歴史書の内、歴代王朝の支配者の記述を本紀といい、諸侯についての記述を世家といい、国に仕えた家臣についての記述を列伝、天文・地理・礼楽・制度など、分野別の歴史を志というのに対して、載記は各地に割拠した（主に叛乱）勢力についての記述のことをさす。そして山陽公とは献帝のこと。そんなわけでまずタイトルがおかしい。献帝を扱うなら皇帝だから本紀のはずだが、山陽公と呼んでいるので皇帝扱いをするつもりがない……のは著者がそういうスタンスを取ったというだけだが、それでも叛乱勢力という見方はしよもないので、載記はおかしい。どういうつもりなのだろう。馬超が劉備に仕えると信任が厚いため増長し、馬超は劉備に馴れ馴れしく玄德呼ばわりしたので関羽がキれて「馬超をぶっ殺したいです」と言ったのを聞いて馬超は反省したという話が採録されているが引用した裴松之も「この頃関羽はずっと荊州だから馬超と顔を合わせたはずがなくデタラメだ」と指摘している。他もこんな調子なので、裴松之は『献帝春秋』の袁暉と合わせて「こいつらはどこの馬の骨だか知らんが何が正しいかわかりもしないのにテキトーに異説をでっち上げやがって後世の人を惑わす史書の罪人だ！」とキれている。そういう書物。ところで裴松之はこんな風に突然興奮することがあるのが面白い。

## ■ 『襄陽記』

『襄陽耆旧記』『襄陽耆旧伝』とも。著者は習鑿齒。襄陽郡の地方志。晁公武『郡齋讀書志』に「前篇では襄陽の人物について記載し、中篇で山川、城邑について記載し、後篇で牧守（地方長官）について記載している」とあり、記載内容が雑多で伝記の体裁ではないので『襄陽耆旧記』が正確な名前だろうとしている。司馬徽が劉備に伏龍、鳳雛として諸葛亮と龐統を紹介した話などが引用されている。しかし習鑿齒が襄陽出身なこともあってか、襄陽出身者を必要以上に持ち上げる傾向がある。人によってはエピソードを作り出してしまっている模様。例えば張悌の死に際の話などは

として侮られることに繋がり、統制が取れず最後には軍を率いての大敗を招いてしまう。そこでこれ幸いと同僚や配下に讒言を受け、処刑されてしまった。

『弁亡論』は呉国や先祖を称えつつ、呉がどうして滅んだのかを論じている。しかしその内容は「曹氏（魏）の暴虐は酷く、住民は怨嗟していた。劉氏（蜀漢）はあまり治績が挙げられず、土地の風俗も田舎臭かった。呉は桓王（孫策）が武力で礎を固め、太祖（孫権）が徳をもって完成した」みたいな調子でありうーん何とも。呉が滅亡した理由についても賢人がいなくなったとか天命であるとかフワッとした表現に留まり二宮の変や孫皓の暴虐な振る舞いについてはぼかしておりあまり真面目に論じようという気は感じられない。一方文章は美文であると言われており論文というよりは芸術作品なのだろう。晋で出身地差別を受けたのもこれを書いた原因だろうか。

## ■『零陵先賢伝』

著者不明。タイトル通り零陵の人物伝。劉巴伝に多く引用されており、劉巴が自宅に泊まりに来た張飛を完全に無視した話や、孫堅が荊州刺史王叡や南陽太守張咨を殺し、それに劉巴の父劉祥が同心していた話などが引用されている。裴松之や『三国志集解』などからは特に大きな突っ込みを受けておらず、おおむね信憑性は高そう。

## 4.正史三国志を紹介する本の紹介

ここでは、正史三国志を紹介する本（正確には、歴史の三国志を紹介する本）を紹介していきます。現在本屋に並んでいる三国志解説書の類はほとんどが三国志演義の解説書です。歴史としての三国志に触れる場合でも、三国志演義がカバーしていない部分の補足として正史三国志の情報を使用しているものがほとんどです。これが曲者でして、悪気なくこれをやられてしまうとどこまでが三国志演義でどこからが歴史の三国志なのかわかりにくくなってしまいます。そこで、三国志演義の混入度合いについてはわかるように紹介していきます。この点について言及がなければ、混入なしと（私が判断したと）考えてください。

か。その理由がきちんと腑に落ちたの、この小説を読んだ時ですからね、私は。といった背景情報まできちんと流れがわかる小説、宮城谷昌光「三国志」です。

欠点としては宮城谷三国志は主に『資治通鑑』という歴史書を参考に書かれている（宮城谷昌光『三国志読本』より）のですが、特に物語の後半、『資治通鑑』に記載されていない事項を扱う際に記述が怪しくなる部分がところどころあります。また、終盤になるほど資料の検討が甘い部分が見受けられます。例えば『傳子』は著者の傳玄と劉曄の子劉陶が対立したため、悪意で劉曄の死に方を悪く書いていると思われるのですが、それを拾ってしまっています。他にもろくな裏付けもなく特定された関羽の生年を採用する、というのがあり、終盤はちょっと意欲がなくなってしまったんですかねえ、という感があります。また、他の宮城谷作品では見られないのですが、『三国志』では宮城谷先生は特定の人物を嫌い抜くところがあり、袁紹、袁術（袁術は仕方ないか）、劉備、孫権、曹丕、諸葛亮、司馬懿などは不当と言うほどではないですけどきっかけを見付けては論難される感じなので彼らのファンの人にはきついかも知れません。そういう場合は黄巾の乱が収束するするところで読むのをやめるのもよいかも知れません。

## 4-3. 小ネタを知りたい

### 4-3-1. 軍事・戦争を知りたい

三国志と戦争は切っても切り離せません。当時の軍事に精通することで三国志への知識を深めることができます。このコーナーでは軍事についてオススメの本を紹介します。

#### ■三国志軍事ガイド

新紀元社 篠田耕一(著) 1993年 ISBN-10: 4883172260

書名はミーハーですが内容は出典がしっかり記述されている部分も多く独自研究ではないという安心感があります。後漢末から三国時代にかけての武装・軍制・戦術・防衛拠点・野外布陣の方法などか